

本県の災害救助犬全2頭 暗闇の搜索 本格訓練

弘前医療福祉短大実習棟を活用

育成、頭数増に期待

本県で2頭しかいない災害救助犬・ラブラドルレトリバーの文太(雄・8歳)とイチゴ(雌・5歳)が、弘前医療福祉大学短期大学の救命・救助実習棟で救助訓練に励んでいる。2頭は青森市浪岡のNPO法人北東北搜索犬チームに所属。県内外の行方不明者の搜索や救助活動に多数協力している。同実習棟では、今までできなかった建物の地下を想定した搜索なども可能になり、より充実した内容で訓練できるようになった。同チーム理事長で指導手の岩本良二さんは「実践で役立つ災害救助犬を育て、頭数の増加にもつなげたい」と期待を寄せている。

(成田真矢)



弘前医療福祉大学短期大学の施設を活用してスタートした災害救助犬の訓練

文太とイチゴは災害救助犬、県警嘱託犬の二つの認定資格を持っており、今年1月には行方不明になった県内の高齢の女性を見事発見。その他、東日本大震災では被災地の岩手県釜石市に赴き、行方不明者の搜索にも携わった。

同短期大学部救急救命学科の北林司学科長から紹介を受け、2頭は実習棟の模擬半壊家屋で5月から月2回ペースで訓練を開始。

実習棟は、今春開設された同学科の実習用に建設。USAR(都

市型災害搜索救助)訓練を積むことができ、県内外の消防署員らも自主訓練などで役立っている。

「暗がりの中の搜索訓練は今までできなかったもので、ここまで本格的な施設があると助かる」と岩本さん。

訓練は青森市浪岡の訓練施設で行っていたが、暗闇を想定した訓練は施設の設備上難しく、他に訓練できる施設も訓練を重ねた。

設もなかったという。訓練3回目となる2日は、岩本さんをほじめとする同チームのメンバー5人と文太、イチゴが実習棟を訪れ、模擬半壊家屋を使って暗く、狭い場所での搜索を実施。トンネルをくぐり建物の奥にいる救助者役を捜し、発見したらほえて知らせ、救助者役からボールを受け取り戻ってくる訓練をした。

文太、イチゴとも慣れない暗がりでの搜索に落ち着きのない様子で、捜せないときは救助者役の呼び掛けなど助けを借りながら、何度も訓練を重ねた。

岩本さんは「慣れてくるとびくびくしていたこともスムーズにこなせるようになる。いろいろなトレーニングを経験させて搜索能力を高めたい。そしてつと災害救助犬を増やせれば」とこれからに期待した。

東日本大震災で搜索活動をした際、文太ががれきの下に救助者がいる可能性を示したが救出に回れる人がおらず、救えなかった命があった」として、関係機関・団体との連携の重要性を痛感したという岩本さん。訓練2回目の時には消防署員らも文太たちの訓練の様子を見学に訪れており、「訓練を見てもらうことで、災害救助犬について理解してもらえらる。連携のきっかけになる」と熱く語った。

同大短期大学の山本洋子事務局長は「学生のための実習棟を地域にも広く使ってもらうことで、地域貢献にもつながると話した。